

社会福祉法人 佑 啓 会 ふる里学舎  
〒290-0265 市原市今富 1110-1  
TEL 0438-86-7611  
発行者 里 見 吉 英  
編集者 三 股 金 利

# 佑 啓

## 友アリ遠方ヨリ来タル

三股 金利

つい先日、施設長のところ  
に朝早く電話が入った。  
「仙台のIだっちゃ」Iと  
は前の職場で同期の桜であ  
る。夜行バスに乗り、朝早  
く幕張に着いたが、研修ま  
でに時間がある。時間つぶ  
しに足を伸ばしたいという  
着いてからは、四方山話  
に花を咲かせた。といつて  
も昔話を中心である。「あ  
いつはどうしてる。あの  
人は？」名前の出た数人が既  
に亡くなっている。暫し夕  
メ息。その後は再び彼の独  
壇場である。「昔はよかつ  
たなあ。」一時は、苦勞人の  
彼ともギクシャクしたこと  
もあったが、過去の些細な  
ことである。「そういうい  
えば同期のIもやめちゃった  
んだ。時々パソコン売りに来  
るけどナ」「ホント、電話し  
よっか」電話口のIも懐か  
しがることしきり。「今日  
会えッかや」などと言って  
いるところに、またも来客、  
これも同期のYである。  
「あんりやまー偶然だっ  
や」そうこうしているうち  
に、施設長が小学校での講  
演から帰る。図らずも仕事

中の同期会の始まりになっ  
てしまった。四人で再び昔  
話をひっくり返す時間はあ  
ったという間であった。  
学舎から参加の車に同乗  
したIに「またな」声をか  
けてホッとした。

彼も仙台に移り住み、更  
生施設、通勤寮を経て在宅  
支援のコーディネーターを  
している。お互い利用者  
と作業をしていた時は、よい  
時代だった。(それは職員  
の側での話かもしれない  
が)体を使い、野菜を作り  
豚を飼い、腹を減らして飯  
を食う。地べたに汗をたら  
して、汚れた顔を笑いあ  
う。美化された思い出である。

二十年間。社会も福祉の  
状況もずいぶん変わった。  
やつこの思いでワープロを  
覚えたのに、世はパソコ  
ン・インターネットに。施  
設職員の書き込めるサイ  
トまでできている。それを  
覗いてちよつと自慢。しか  
し、待てよ。こんなことは職  
場で聞けて解決すりゃいい  
やねえのか。こういうのに  
決まって会議の場では黙  
して語らず。不満のやり場

自己満足になってい  
るのでは、と懐疑的に  
なるのは既にボジ  
ンというところか  
昔は仕事の延長でケン  
カまでしたもんだ。今思  
えば何と大人気ない。そ  
れほど仕事が好きとい  
うことでなかったが、な  
ぜか夢中だったのだ。  
福祉の状況変化に戸  
惑いを覚えるのも、あ  
る程度経験のある人  
だろう。利用者  
の権利と自己選  
択がすべてという  
なら気が楽でいい  
が、そうもいき  
ない。かえって不  
利益になること  
もあるだろう。中  
身によって判断の  
違いは当然出てく  
る。どうやって実  
態に即したものと  
するかの。いっそ  
これもガイドライ  
ンをどこぞで作  
って欲しいと考  
えたが、これが  
我々の仕事。敵  
前逃亡はしたくない。個別に  
合せて考えるほ  
かはない。確  
かに、本人主体  
という考えは  
少なく、施設の  
スケジュール  
で仕事を進  
めていたこ  
とは否めない。  
今思えば、  
この世界その  
ものがそう  
いう環境に置  
かれていたの  
だろう。不思議  
に思うより  
仕事の足手  
まといにな  
らないように  
懸命だった  
のかも  
しれない。い  
うより勉強  
不足だった。  
今やヒトゲ  
ム計画とや

らで、遣伝子の説明が進み、  
将来のことが大よそ判ると  
言う。昨今の殺伐とした事  
件を聞くにつけ、これが本  
当ならここ数年遣伝子の破  
壊が急速に進んでいること  
になる。

児童虐待の例も、キレる  
遣伝子のなせる技なのか。  
夫婦も親子関係も命を前に  
何の意味を持ち得ないのか。  
すべてに抑止力が働かなく  
なってしまったようだ。夫  
婦なんて元をたせば単なる  
他人。喧嘩もするし、う  
つとうしくなることもしば  
しばである。よく感じてい  
る。でもたまにはいいこと  
もあるし、子供がいるでは  
ないか。人と生きているこ  
とは理由はともあれ、我慢  
をするこの連続なのだ。  
またまた古めかしいオジ  
サンになっていく。

「我慢をせよ、我慢を」私  
の考えるほど事は単純では  
ないだろうけど、成人式の  
愚行も、結局自分達が恥  
をかきことになったではな  
いか。

遣伝子がすべてとなつた  
らこの仕事は何と無力なの  
か。人と人との関わりの中  
で作られていく部分、いわ  
ゆる可塑性というものを信  
じなければ面白くない。  
施設長の講演に対する感

想に小学生が書いてきた。  
「障害をもっている人も、頑  
張って生きている。ぼくら  
も頑張る。」  
うれしい話だ。私は単純で  
ある。

夕刻再びIからの電話  
「ホテルは取ってあつけど  
またいつからヨー」急いで  
Yに連絡をとり、同期会第  
二幕の始まりであった。酔  
いに任せての思ひ出話はア  
レンジされ、「だっちゃ」  
「だべさ」の機関銃。あつ  
という間に夜は深まり、午  
前0時を過ぎてからホテル  
にご帰館。  
旧交温めあつた時間を過  
ぎると確かな疲れと、別れ  
の寂しさで再びネオンに吸  
い込まれた私でありました。  
(指導課長)



# 父として

家老 和則

二歳になった頃、悠が障害児と認定され、あれから十八年の長い月日を、この子と家族とで生活してきた。私が自宅に帰ると学舎から作文の依頼があったことを妻から知らされ、さてどのような事を作文に書くのかと迷っていましたところ、今までの生活での出来事がいろいろと思い起こされてきました。妻と私とは、多少記憶が違っていました、その日は思い出話で夜が更けてしまいました。

認定が確かなものになった日から、妻はどのくらい思い悩み、また泣き暮らしたのか思い出さされます。私と妻は「な」に「多少」「言葉が」「動きが」遅いからといって、昔はよくこのような子供がいたものだ、すぐ話をするようになるよと思ひ込んでいました。しかし悠が保育園、小学校と進んで健常な子供たちとの成長に著しい差を見せ付けられると、さすがに心に動揺が生まれてきたのでした。

この二十年を思い起こすと多動で、一人で電車に乗り警察から保護されたとの連絡やら、わがままを押し通そうとパニックを起こしたり、急激に熱を出し痙攣を起こしたりと、悠に振り回された小学生時代でしたが、一人通学や集団行動、身の回りの処理等を少しずつですが練習する日々が続きました。やがて悠は、中学生の生活に入り、その生活の場は寄宿生活でした。入学式も済みこれから親子が別れるその時は「親子」親子と子を強く感じることはありませんでした。

甘え、身体能力の向上、身の回りの生活の確立等を、同期生八人と日々生活を共にし、頑張っている悠がいました。親と会える日は年に数えるほどでしたが、会うたびに入学当初のあのけない面影が変わっていくことが確かに感じ取られました。

た。八人の共同生活者を友達と認知し、親が聞いても分かりづらい会話で意思を伝え合っているのです。生活ぶりを見ても朝の起床、着替え、洗面、マラソン、農作業などを生活の日課としていましたが、この寄宿生活の中でも障害の違いで大きく伸びる子や、悠のように遅い子がいることを、親としてハッキリと認識させられました。障害に合った教育、子供に合った指導等はこれから受けていきたいと思います。また、中学から高校への道をどのようにするか夫婦で考え、地元での仲間作りをしながら生活の基盤を地元に移すことにし、こうして悠にとって教育という時期が終わり、社会人として実生活の始まりを迎えました。

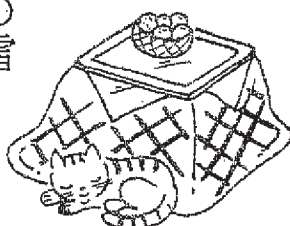
この実生活を始める前に大きな発作を起こし、その状態を見た私は不憫さを大きく感じるようになり、生活習慣に甘えを許す親にもなっていました。悠は、すかさず赤ちゃん返りしてしまい、極上の甘ったれに戻り何もしようとしなくなり、そんな中、養護学校を卒業と同時に幸いにもふる里学舎へ通所できるようになって、悠が情緒的に落ち着いている日が多くなり、我が家にも平穏さが戻ってきました。焦らず、ゆっくり子供達と向き合う、ふる里学舎での生活が、悠にとってはいよいよ結果を生んでいるのだと確信しています。

これからの希望としては、家族としての悠を受け止める生活も大事にしながら、親亡き後の生活の準備として、家族から離れて仲間と暮らす生活にも徐々に慣れていくことを願っています。もうすぐ二十歳になるのに、心は幼いまま図体ばかりが大きい息子ですが、心の幼さに助けられている私です。何をこの子にしてあげられるのだろうか。

世の中は、福祉が変わると大騒ぎをしているようですが、仕事に言い訳を求めて情報に疎いのが正直なところだと思います。本人に合ったサービスを選ぶ

正しい目が親に要求される時代が来るらしいとは聞いていますが、この時期にふる里学舎に身を置いておくことを有難く思うと同時に、父親としてももう少し出番を増やさねばと自責の念にかられております。悠にとって社会生活の活動の場として、また仲間作りの場として、中学時代の仲間作りのように、ふる里学舎の先生、そして仲間たち、言葉が通じなくても心で分かり合えた生活をこの子に希望すると共に、ふる里学舎の先生の言葉で子供たちの支えになって頂きたいと思っています。

これから皆様のご支援を頂いて、親子ともに成長していきたく願っております。  
(家老 悠・父)



## ふる里の雪

高橋 志野

千葉では珍しく大雪のふった日の夜、学舎に泊まりこの一年を振り返ってみる。

私と同じように、今夜一晩を学舎で過ごすことになった職員数人で、先程までささやかな宴を開いていた。お酒も入り、頭の中は外の雪のように真っ白で、手を休めてばかり、原稿用紙まで白いままである。窓の外に目をやると昨日までそこにあった景色は、すっかり白い布で覆われていた。雪国で育った私には、見慣れているはずの白い世界に、久しぶりに出会った気がする。故郷のあの白さと思うとなぜか切なくなる。それと同時に自分には帰る場所があることを思い出しホッとします。

誰でも自分の家が一番心安らぐ場所だろう。雪のため、今夜は学舎に泊まることになったのだが、たった一晩家に帰れないだけで家が恋しく感じる。家のこたつでのんびりテレビでも見たいなと考えるが、ふと毎日の生活している寮生のことを思う。みんな家族と離れて集団生活を送っている。どんなに環境を整った素晴らしい施設でも、やはり家族のいる家にはかなわない。私たちがどんなにがんばっても埋められない心の隙間を、家や家族は満たしてくる。帰省前の笑顔、家から戻ってきたときの満足げな表情を見ているとうれしくもあり、ちょっぴりさみしい気もする。私にはあの表情は作れない。しかし、今の私にどれだけのことができるかわからないが、みんなが学舎に戻ってきたとき、ホッと一息つけるような空間を作れたらいいなと思う。「帰ってきた」と感じられるような場所になりたい。自分のことを思っている人がすぐ側にいるという居心地の良さを感ずけてもらいたい。

また手を休めて外を見る。しんと降り積もる雪は、冷たい空気をそっと包み込み、冬の刺すような寒さを、ほんの少しだけ和らげてくれる気がする。雪の降り積もる故郷の冬は寒く、そして暖かい。あのじんわりとした暖かさをこのふる里学舎で感じてもらえたら、本当に幸せに思う。

(指導員助手)



## 編集後記

最近のニュースに触れると、「大切なもの」について考えさせられる。親の、子の、患者の生命を奪う人もいれば、自らを犠牲にして他人を救おうとする人もいます。ふと、自分にとって大切なものは何か考える。自分の「家族」それとも「仕事」？

堀金 兼太郎